

泥三昧



田 中 澄 子

毎年のことながら砂場での遊びがもの足らなくなつた子どもたちは、他の遊びや遊具などには目もくれず、園庭へと進出して遊びを広げる。そこには永い年月培われた固い土があり、砂場では味わえない魅力が潜んでいることを知っているからに他ならない。

子どもは遊びの天才といおうか、どんなに頑固な土であっても小さな手がこわして、目的を叶えてしまう。

脇目もふらずに土を掘り、それを篩にかけて使いわけ、時には泥にしてしまう素朴な遊びに、時間、空間、処などにとられない自然と一体となった、三昧境の姿をみる。

いつの年も、どの子も楽しむ泥三昧に、伝統的な鉄マン作りがあるが、鉄マンとは泥でつくった饅頭ではあるが、子どもは鉄よりも固いと信じており、その年の名人も生まれる程の身の入れようで、コンクールをみるのもまた楽しい。名人ともなると誰よりも大きくて形よく、ピカッと黒

光りして貫録あり、その上、落としても絶対にこわれないものを作らねばならない。厳しい条件ではあるがこれがまたこたえられないとみえて、夢中になって競いあう。私も虜になつてとうとう名人に弟子入りした。

先ずは入門の巻。

鉄マンは土作りが第一ということで、足許の土を掘りはじめたところ「先生あかん。ここの土は悪い」とストップがかかった。名人曰く。土は、

①地表は白くてサラサラして、下の土は黒くて固く、擦ればツルツルになつて黄色く光ってくるのが最上とのこと。

②ザラザラしたのやジトツとした土はこわれやすいので、必ず手で確かめること。

等の予備知識を与えて、良い土のある場所へ案内して、実地教育をしてくれた。そこは園庭の塀の下、すべり台の傍、花壇への道などで、全く思いもよらない所ばかり、一

見して他の土との違いがわかり恐れ入った次第である。それにしても、園庭の土はみな同質とばかり思いこんでいた自分の単純さが恥ずかしく、何時の間に広い園庭で見つけたのかと改めて感心もした。

今にして思えば、雨が降っても傘をさして園庭の水たまりへ入り、ピチャピチャと泥の跳ねるのを面白がったり、両手で泥をすくいと指の間からこぼれる泥をじっと見入っていたこともあった。晴の日は金槌とスコップを手にして友だちと園庭を掘りまわり、先生から注意されていたことも何回かあったが、何れもそれは土の研究をしていたと知って、息の長い努力に対して改めて最敬礼したのである。

そこでいよいよ工程だが、

①地面の砂は静かに払い取って下の黒い土を手でこす

る。
②土がツルツルになればそこへほんの少し水を落として泥をつくる。

③それを少し取ってキュッと固めるが、このキュッがコツで一寸落として割れなければ合格。

④その塊に別質の白いサラサラの細かい砂をまぶし、指先で丹念に磨きあげて球にするが、この時少しでもザラツ

いた土が混ればこわれやすいので、先生には叱られるが芝生の樗の下砂が最高だからそれを使うと失敗がないと強調した。そういえば十年前前にも本堂の縁の下の漆喰を削りとして困ったことがあった。

⑤固くなった塊に泥と砂の工程をくり返して層を重ねるが、その時、水でもよいがほんの少し唾液をふりかけてこすると、一段と固さが増し黄色のにぶい光沢も出る。

⑥ゆっくりと丁寧に固めたものを二三回落として強度を確かめながら、泥、砂をくり返すが、その時に少しでもヒビが入れば一からやり直す。

こうしてできた鉄マンは直射日光で乾かすとこわれやすいので、必ず陰干しにしなければならぬが、最盛期には数個の鉄マンを両手に抱えて探しまわり、あげくの果て、戸棚やピアノの下で乾かすので困ってしまう。

泥あそびは何と手間ひまのかかるものであろう。大人の土いじりもこれによく似たものだが、泥の文化(?)が日本文化の源としたならば、外国の子はどうなんだろう。土が失われていく日本の都会の子はなどと思いめぐらすにつけ、園庭の整備はどうしたものか迷うこの頃である。

(光明幼稚園)